鹿島橋

かけはし

第175号
２０２１年８・９月号

発行：峡南教育事務所
地域教育支援スタッフ

南巨摩郡富士川町鰍沢771-2
TEL:0556-22-8154
FAX:0556-22-8144
HPでも御覧になれます。
http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-mk/index.html

令和三年度　峡南地推協　佐野貴宣（たかのぶ）新会長　あいさつ

新型コロナウイルスが依然と猛威を振るい、生命の危険と絶えず隣り合わせで、通常の生活に戻るには、まだまだ時間がかかる状況が続いています。そのような中ですが、令和三年度峡南地域教育推進連絡協議会（地推協）を力強くスタートすることができました。

さて、私は地推協の会長に選任されました佐野貴宣と申します。四名の力量のある副会長さんをはじめ、理事・委員の皆様、峡南教育事務所や関係機関の皆様方の温かいご協力とご指導をいただきながら、峡南地域の教育推進のために、微力ではありますが邁進していく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

次代を担う子ども達の健やかな成長は、地域全体の願いでもあります。今、地域や家庭での教育力の低下や子どもの貧困等、子ども達を取り巻く環境が大きく変化し、地域全体の共通課題となっています。地推協は、このような課題を解決するため、二三の構成団体に積極的に参加いただき、「地域の子ども達は、地域で育てる」という基本理念のもと、「連携活動」「交流活動」等を軸に様々な立場から創意工夫と知恵を出し合い、意見交換や情報交換によってそれぞれの団体が今日的な課題への対応や解決を目指していくことが重要だと考えています。地域の大人ひとりひとりの力で子ども達に大きな光を与えることができたらよいと考えています。

成長する子ども達の豊かな教育環境づくりのため、家庭・学校・地域が共に手を携えて協力・連携していくことが今まで以上に求められていると思います。子ども達が笑顔で安心して生活できるよう共に学び活動していきましょう。

皆様方のご支援とご協力を重ねてお願いいたします。

人権講演会に関するお知らせ

地推協と峡南教育事務所では、八月二五日(水)に作家の江宮隆之先生を講師に迎え、人権講演会を計画していました。多くの申込をいただきましたが、まん延防止等重点措置期間中ですので、残念ですが参集して行うことは中止しました。昨年度も感染症拡大防止対策のために同じ講演会が中止になったので、今回こそ江宮先生の講演を聴きたいという声をいただいております。主催側では、動画配信でのお届けを検討中です。放映可能となり、準備が整いましたら連絡しますので、その際にはご視聴ください。

今号の1枚は
佐野　貴宣　地推協新会長です

身延町総合文化会館すべり台近くでジャンプ!!　さすがの運動神経。←空中です！

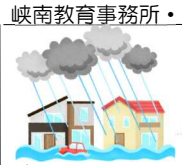
避難指示が出たら
・
「かけはし」で避難を！

鹿島橋の親柱
富士川舟運の粋なデザイン

目次：

令和3年度峡南地推協　佐野貴宣新会長挨拶　1
人権講演会について　1
教育フォーラム　林晏宏先生よりメッセージ　2
市川・身延・青洲各高校の防災教育紹介　2 3
富士川町青少年育成町民会議　あいさつ運動　3
身延小　篆刻体験　4

自然災害や，感染症，心配事の絶えない夏でした。各地域や学校では、現実を知り，身を守る知識とたくましさを身に付けられるようにさまざまな行事が行われました。



7月6日（火）開催　峡南地域育フォーラム講師　林　晏宏氏　よりメッセージ

前号でもお伝えした教育フォーラム「巨大災害時代と峡南の防災・減災」の講師林晏宏氏よりメッセージをいただきました。

災害は突発的に起きます。防災マニュアルを確かめている暇はありません。

人の命がかかっている事態となれば、組織の責任者は目前の惨状を前に、為すべきことを直ちに判断し決断しなければなりません。迷いや躊躇は許されません。したがってマニュアルは明快で実践的なものでなければなりません。そのノウハウを頭に叩き込んでおきましょう。また災害はそれが起きる季節、時刻、環境、天候、曜日などによって被災の実態が異なります。

最悪の事態に備え、平時からいくつものケースを想定しシミュレーションをしておきましょう。

林氏の特別寄稿（別紙）もぜひご覧下さい。アンケートでいただいた質問とその回答とともに、峡南教育事務所ホームページにも掲載しています。

（←次ページに続く）市川・身延・青洲　各高校の防災教育紹介

峡南地域は土砂、洪水、地震災害が心配な地域です。学校では、さまざまな防災教育を行っています。今回は高校三校の取組をお伝えします。

市川高校

地域探究成果発表会の中で

六月八日（火）五・六・七校時に体育館で地域探究学習の集大成として「地域探究成果発表会」が行われました。講評者五名、保護者・地域からの参加者四四名も、三年生八班（各クラス代表二班）の発表に耳を傾けました。

小林智校長が「コロナ禍だからこそ、地域の良さや課題がわかることもあった。課題を解決する知識を身に付け、見方・学び方を知り、自分らしい生き方や自分の在り方を考えてもらいたい」という挨拶をし、発表が始まりました。テーマは生徒が自由に決め、商店街・教育・農作物・伝統工芸品・山梨の魅力など幅広く、居住地・市川三郷町・山梨県のいずれかについて調べました。

小林校長と講評者の方々

市川三郷町の災害時の避難と対策」の発表内容

中でも防災について取り組んだ班は過去の災害を調べ、実際に市川三郷町を歩いて災害に関する標識を確認し避難所の課題（感染症拡大防止のため収容人数を半数に制限）から、行政と住民が連携することが大切だと発表しました。また、夜間にも目立つ蓄光式の標識や子どもが関心を持つ標識の設置を防災課へ提案、校内への洪水標識の設置を検討、と、その取組は実際に動き出していました。

各発表が終了すると市川三郷町役場や県立大、一般企業からの講評者五名のうち一名が助言や感想を述べました。探究活動に協力した住民が感想を述べる場面もあり、地域との協働が感じられました。最後に、渡井渡市川三郷町教育長が総括し「自分で考えて行動する人が求められている。課題発見能力がとても大切」と助言しました。

発表の様子

休憩後、発表以外の班が壁一面に掲示された模造紙でポスターセッション（**写真↑**）を行いました。参加者が興味のある発表を聴く形式で、最初は照れていた生徒もいましたが、発表が進むにつれ、どの班にも活気が出てきました。

校外の資源と関わりながら、高校生が地域の課題や魅力を発見したり、若者らしい柔軟な発想を生かしたりしていく姿が印象的で、この経験が職業選択やボランティア参加など将来につながっていくと思われる行事となりました。

身延高校　防災講話

六月十八日（金）、体育館で一年次（学年）を対象に常葉大学社会環境学部小村隆史准教授を迎え環境防災教育を行いました。

小村先生の講演はやり取りをしながら進む形式なのですが、今回は感染症拡大防止のため生徒が自分のことを書く形式をとり、先生は巡回しながら一人一人に語りかけるように講演を進めていきました。

十七年後はどうなっている？

先生はまず、二〇三八年時点での自分と家族構成、どこに住みどんな仕事をしているかを描き出すよう指示しました。南海トラフは駿河湾から四国沖さらに日向灘沖へと続くプレート境界です。九〇年から一五〇年間隔で巨大地震を起こしており、それが南海トラフ巨大地震です。前回は一九四四年と一九四六年（東半分が先行し西半分も二年後に発生）、二〇三八年頃発生すると著書で述べた地震学者もいるとのこと。

時代の宿命「君たちは不幸な時代に生まれてしまった」

私たちは生まれる時代と場所を選べませんが、それにしても先生は「君たちは不幸な時代に生まれ

青少年育成富士川町民会議 あいさつ運動

青少年育成富士川町民会議では、年間を通じて四回、町内各所であいさつ運動をしています。七月は青少年非行・被害防止全国強調月間なのでその取組の一つとして行われています。富士川町役場前交差点の様子を取材しました。

七月一日(木)朝七時三〇分～

今回は五名が集合し、会長の髙橋真幸さんからの感染症のため、思うように行事ができない残念な中、あいさつ運動はできてよかった」という挨拶があり、登校する小中学生を迎えました。子ども達はスクールガードや保護者にも見守られ、元気に横断歩道を渡り、挨拶して登校しました。あいにくの雨でしたが、子どもの声で付近が明るくなりました。

髙橋さん

青少年育成富士川町民会議とは

地域の子どもは地域で守り育てる」というスローガンの下、青少年の育成に関わる団体より約八〇名の役員が参加しています。あいさつ運動以外にも、有害図書販売の調査や大自然体験会（野外キャンプ）など、子ども達が豊かに安全に暮らせるような活動をしています。会長の髙橋さんは以前教師をしていた頃から携わっていましたが、子どもと直接触れあったり、子どもの普段の姿を見たりすることで、地域の人に守られて育っていることを強く感じるそうです。

最近は感染症の影響や子どもの数が減少したことで、地区ごとの区民会議といった地域組織の継続が難しい一面も出てきました。「現在は今までのことをそのままやっていくのではなく、実情に合わせて変えていく過渡期」という髙橋さんの言葉が印象的でした。時代の流れに乗り柔軟に対応していくという前向きな意見は、現在重視されている「持続可能な社会の実現」に結びついていました。

市川高　地域探究成果発表会／身延高　防災講話／青洲高　青洲学　（前ページから続く←）

てしまった」と衝撃的な表現をしました。伊豆半島から九州東岸までが同時に被災地となる巨大災害です。被災地域が広すぎるので被災地域外からの支援は期待薄。その時生徒は二〇代末から三〇代前半。先生はなぜか、さまざまな職業と年収を調べるよう言いました。

防災教育はキャリア(勤労観や職業観を育む)教育

先生の結論は「未来形の防災」という着眼点です。「予定されている巨大災害なのだから大切なのは人生設計。しっかり学び、しっかり稼げるようになり、安全な場所に丈夫な家を建ててほしい。失業しないような職に就いてほしい。今の学びが、将来の自分と家族を守る」と。

生徒代表の依田紗采さんが「自分自身の将来と環境防災について考え生き抜く力を身につけます。何か行動を起こします」とお礼の言葉を述べました。小村先生の思いは生徒に伝わっていました。

南海トラフプレートを体で説明する小村先生

青洲高校　青洲学

青洲高校では、三年間で体系的に峡南地域を学ぶ青洲学を設けており、将来この地域を支えていく人材を育成することを目的としています。地域で学ぶことを重点に、ネットではなく直接やり取りし、発表や提言などの形を創造していきます。担当の先生は「どんなことでもいいので、生徒には独創的なことに取り組んで欲しい。やり遂げた達成感が興味関心や自信につながると嬉しい」と話していました。

ジグソー法による学び

六月三十日(水)青洲高校で外部講師による防災講座が開かれました。一年生二七二人が、科・クラスを飛び越えた三六グループに分かれ、グループ内で分担して五講座に参加しました。各講座で学んだ内容を、自分のグループに持ち帰り他のメンバーと共有するジグソー法で活動しました。

「防災とは命を守る」

市川三郷町防災防犯係、中込章さんの講座は、必ず起こる災害にどう対処するかが大切で、高校生は自分を守りながらも地域への貢献もできるという話から始まりました。南海トラフ地震では、自助・共助・公助を心に、指示が出たら空振りを恐れずすぐに避難すること、市川三郷町では、五つの避難所が最初に開設されること、やみくもに公民館などに逃げるのではなく、近所との連絡・避難する・しない）も重要なことなどを学びました。大災害時には、支援システムや医療が行き届かないこともあると、災害シミュレーションビデオ視聴で、生徒は実感できました。

中込さん

日頃から備える

さまざまな非常食が紹介され、クッキーが生徒に配布されました。非常食は自分で準備し、使った分を買い足して、常に一定量の備蓄をしておく（ローリングストック方法）とよいそうです。

最後に中込さんより

「避難とは自らの命は自らが守ること。人のためには①今日の防災の話をする、②ハザードマップを見る、③毎月一日には無料で使える伝言ダイヤル一七一を家族で試してみる。地域の防災意識を高めるために、若者の意見を待っています。」

身延小学校　篆刻（てんこく）教室　～学ぼう！伝統工芸～

身延小では、六月二二日(火)～四校時、六年生三六人が二つのグループに分かれて、身延町の印章店観水堂の雨宮邦夫さんを講師に迎え、篆刻を学びました。篆刻とは、篆書体という字体で印章を彫る作業で、書道の一形式です。当日は、最初に篆刻の一般的な説明を受け，次に九〇分ずつ青田石という印材に自分の名前を彫りました。事前に雨宮さんが下書きをしてくれた名を、児童は一本の印刀でなぞりました。篆刻は県内の様々な学校で取り入れられていて、一五ミリメートル四方の石に文字一字を彫るのが一般的です。身延小では、それより大きな二四ミリメートル四方の石に、児童の名全文字を入れます。そのため、三文字で、画数の多い名前は完成させるのに難しく、時間がかかりました。

児童達の懸命の作業

篆刻中の教室には、カリカリと印刀の音が響き渡り、全ての児童が集中して作業していました。細かい作業なので、思うようにいかず　もうやだ」と一人の児童が思わず発すると、別の児童が　失敗してもいいんだよ。きれいに押せればいいんだから」と励ましたり、お互いの文字を見ながら『これ何て書いてあるの？」と興味を示したり、教室は児童の生き生きとしたやりとりと素直な興味にあふれていました。

最後の仕上げ

完成前に雨宮さんが仕上がりを確認し　もっと彫らないと字が写らないよ」と彫り直しを促したり難しい文字を　生懸命彫った子に　よく頑張った、これは大変だ」とねぎらったり、一人一人を丁寧に温かく指導していました。中には、雨宮さんの手直しがほとんどいらない渾身の作品もありました。子どもは、　仕上げがすごい！」　『この赤いの(朱肉)何だろう」　先生(雨宮さん)の印刀は太い」など、興味と驚きで雨宮さんの作業を見つめていました。次々持ってくる児童の作品の仕上げを一人で行うのは大変な作業で、雨宮さんの額には汗が光っていました。作品が完成したところで美しい和紙に最初の一押しをし、その印を持ち上げるのを児童本人に任せます。そうすることで、自分の作品を最初に見ることができます。

児童は印を上げた瞬間に　嬉しい」と感嘆の声を上げたり、しみじみと自分の印を見て微笑んだりしていました。作業後の印床(篆刻する時印を固定する道具)の片付けで普段から児童が道具を丁寧に扱っていることがうかがえました。

上手にできた！みんなの作品

元気いっぱい「終わりの会」

感想言える人？」という担任の先生の問いかけに、全員が手を挙げました。　最初は簡単に見えた。実際は難しかったが、楽しかった」　雨宮先生に弟子入りしたい」　印を外したとき嬉しかったし、　卒業制作の）条幅　大型の書道作品）に押すということなので、卒業式が楽しみ」　今回は白文　文字を彫り他を残す彫り方）で簡単だと思ったが、力のいれ具合が難しい。次は朱文　周りを彫り文字を残す彫り方）でもやってみたい」などの発言がありました。

誰が　印を）買っているのか？」という質問に、雨宮さんは　認め印や実印など必要な人が買うが、篆刻はもっと遊び心のあるもので、絵や書道などの作品に押す趣味の印」と答えました。また最も大きな印、小さな印、制作時間などについて次々と質問があがりました。高価な印については、象牙の話に及び、児童は象の牙の印があること、ワシントン条約で規制が厳しく、きちんと登録しないと罰金五百万円が課せられることなどを聞き、驚いていました。

プロとの交流による豊かな学び

雨宮さんは技能士会のメンバーとして、また県の職業能力開発協会のものづくりマイスターとして、子ども達に二十年以上篆刻を教えてきました。最も気をつけていることは、けがですが、担任の先生方の協力もあり、今までにけがをした子どもはいませんでした。また、子ども達が、作品完成後に感動して泣き出したり、今後も習ってみたいと言い出したりする瞬間に出会うと良かったと思うそうですが、何より子どもに教えることが楽しいそうです。

雨宮さん自身は篆刻は独学で、今では一般的な文字ならば、篆書体が頭に浮かぶそうです。また、篆刻の楽しさを尋ねると「篆刻だけでなく全ての）仕事に対して、気持ちが入る」ことだと答えてくれました。水墨画の望月勅雄先生に印を頼まれた時に、気に入ってもらうまでに何度も作り直し、完成したときにはとても嬉しかったそうです。

篆刻体験だけでなく、雨宮さんの仕事への姿勢からも、子ども達は学ぶことがありました。